

人格形成を規定する要因分析(VI)

— 家庭における文化的環境要因の変化が
性格形成に及ぼす影響について(2) —

The Study of Psychological Factors Effecting
on Development of Personality(VI)

高橋正臣 凍田和美
Masaomi Takahashi and Kazuyoshi Korida

I. 研究目的

性格の構造上、遺伝的・生得的度合が強く影響する領域としては、深層人格に属する情動面があげられているが(1, 2, 3, 4)、大脳生理学の研究がすすむにつれて、このことは一層明確化されている(5, 6)。

一方、性格形成における後天的な環境要因としては、親子・兄弟等の人間関係要因、社会経済的要因、文化的要因等を主体とする家庭環境要因や、学校・地域社会・文化民族的な要因を主体とする社会的・風土的な要因があげられる(7, 8)。

本研究においては、気質に準ずるほどの性格の基本的・深層的形態を構成する乳幼児・児童初期の性格形成における家庭的環境要因のうち、家庭における文化的要因の時代的变化をとりあげ、それが性格形成とどのような関連にあるかを、次の仮説の検証を通して明らかにしようとした。すなわち、家庭における性格形成の文化的規定要因を時代的变化として巨視的にとらえるならば、昭和28年のNHKのテレビ放送を契機として、「活字文化」より「映像文化」への転換という典型的な文化の位相の変化としてみることができる。とするならば、この家庭における文化の時代的変移は、その性格形成上の規定力からみて、当然、性格特性の時代的变化を生じさせると思われる。本研究は家庭文化の変移と形成される性格の変移の関連性を通してこれを検証するものである。なおこの研究は、高橋(高橋正臣)の1981年「人格形成を規定する要因分析(IV) — 家庭における文化的要因の変化が性格形成に及ぼす影響について —」の集約的な研究である。

II. 研究手続

1. 性格測定

「YG性格検査（矢田部・ギルフォード性格検査）・一般用」を実施。

2. 調査対象とテスト実施時期

(1) 調査対象：大分県立芸術文化短期大学女子学生、計3,343人。

(2) テスト実施時期：昭和39年より平成4年まで、継続29年間（但し昭和44年を除く）毎年6月～10月に実施。

(3) 調査対象人数：各年毎の調査対象は以下の表の通りである。

表1の1. 時代区分調査対象

年 度	S.39年～S.49年	S.50年～S.55年	S.56年～H.4年	計
時代区分	活字文化期	移行文化期	映像文化期	
調査対象	1,125 人	757 人	1,461 人	3,343 人

表1の2. 各年毎調査対象表

年 度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49
調査対象人数	24	94	118	124	141	128	135	103	77	181
	S.50	S.51	S.52	S.53	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59
	105	140	116	137	127	132	140	134	122	117
	S.60	S.61	S.62	S.63	H. 1	H. 2	H. 3	H. 4	計	
	127	135	143	94	112	74	87	176	3343	

3. 時代区分の類型化

性格形成における家庭の文化的環境要因の研究対象としては、従来「しつけのsyntality」が主にとりあげられ、現在までに、すでに数多くの研究成果があげられてきた（3, 9）。

ところで「しつけのシンタリティ」以外の家庭の文化的環境要因として研究対象にあげられるものは、“両親を主体とする文化的syntality・家庭内での遊び（最近は特にマイコンゲーム）・ステレオ・ラジオ・カセット・マンガ”等が考えられる。しかし、それらを家庭文化の時代的変移の位相という面から、性格形成の規定要因として科学的、統計的に質的・量的にその規定度を解明していくのは、かなり困難である。

これに対し、活字文化から映像文化への変移に関して、文化の質の変化については、昭和28年2月のNHKテレビ放送開始以後、徐々に子どもの生活へ与えてきたテレビの影響度を重視した文部省が1ヶ年にわたって行った「テレビジョン影響調査・昭和34年」を発表して以来、教育学的、社会学的、心理学的等の面から急速に研究が進められ（10, 11）文化の量的変化については生活時間、視聴時間、刺激内容及びその種類等にもその変移をとらえることが可能である。

従って本研究においては、人格形成と関連して、家庭における性格形成規定要因としての

人格形成を規定する要因分析

「活字文化」および「映像文化」をとりあげてみた。

さて、最も基本的な人格の形成について、家庭文化の影響を強く受ける時期は幼児期であることに異論の余地はないであろう。とするならば、昭和30年以前に出生したものは（Y G検査を受けたのは昭和49年以前）、昭和30年時の日本におけるTV普及率0.9%、昭和34年の普及率23.1%からみて、幼児期には全くといっていいほど、TVには接することなく、したがって人格形成上からも、TVの影響は考えられず活字文化で幼児期を過ごしたと思われる。

また昭和31年～36年に出生したものは（Y G検査を受けたのは昭和50～55年）、昭和31年で2.3%、昭和36年で49.5%の普及率と日本全国の家庭の約半数となる。したがってこの期間の子どもは、活字文化から映像文化への移行期にあったとみることができる。

これが昭和37年以後の出生者（Y G検査を受けたのは昭和56年以後）になると、昭和37年のTV普及率は64.8%、昭和38年83.0%となり、日本の大多数の家庭にTVは購入され、後述の小学校児童のTV視聴時間でも分かるとおり、決定的にTV文化が子どもの生活に入り込み、映像文化の時代に推移したといえる。

以上のことから、Y G検査を〈昭和39年～49年〉に受けた対象者を『活字文化群（期）』、〈昭和50年～55年〉に受けた対象者を『移行文化群（期）』、〈昭和56年～平成4年〉までに受けた対象者を『映像文化群（期）』と分類することにした。（後記〈テレビの普及率と視聴時間〉参照）。

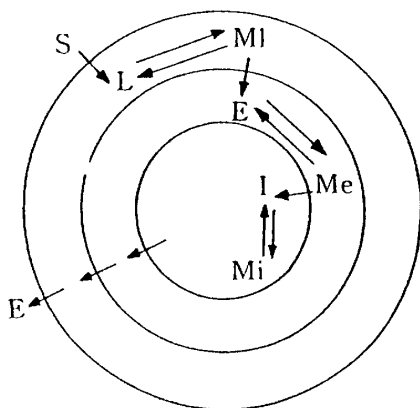
III. 研究結果と考察

1. 「活字文化」と「映像文化」の心理的メカニズム、およびパーソナリティ形成との関連性について

(1) 活字文化について

〈活字文化と心理的メカニズム〉

活字刺激の場合は、まず読書材料としての言語記号（外的刺激）の存在があり、これを読み手の刺激受容器官の視覚が受け入れ、読み手の言語能力体系に照らして客観的、辞書的に認知し（言語的意味づけ）、次に彼のもつ知的、経験的体系を動員して経験的認知（意味）を成立させ、さらにこれが自我体系を発達させて個性（パーソナリティの個人的特性）を強めていくという心理的過程をたどる。



パーソナリティの読書適応（坂本）

読書のこの心理的メカニズムを、坂本（坂本一郎）は次のように「読書の人格的適応」としてその図式化をとおして、まことに的確に説明している。

「読書行動の主体としてのパーソナリティの構造を形式的に分析すると、図のようになる。すなわち、もっとも表層は言語能力体系（L：language organization）の領域であって、これに外部から言語刺激（S）が加えられるとそれに言語的意味（MI：linguistic meaning）が成立する。そしてMIはLに編入され個人の言語体系を発達させる。……次いでこの

MIは、中間層の経験体系（E：experience organization）の刺激となって、そこに経験的意味（Me：experience meaning）を成立させる。このMeはEに編入されて、彼の経験体系をいっそう発達させる。……

さて、個人の言語体系および経験体系を統一している自我の体系（I：I organization）がその深層にあると考えられる。

MeがこのIの刺激となると、Iにはこれに対する個人的意味（Mi：I meaning）が現われ、これが自我体系をますます発達させて、彼の個性（パーソナリティの個人的特性）を強化する。

しかし、すこし補説しなければならないようである。個人が第二次の位相で把握した経験的（文化的）意味は、その位相では主観性が禁止される傾向がつよく、なるべく高い文化価値を経験するように心構えられるが、それが自我領域への刺激となった場合は、もはやそのような拘束を超越する。個人は、読書材料から生産した意味を彼個人の自我の思うままに個性化してよいのである。例えば今ここに乃木大将の伝記があるとして、大将の最期の殉死の意味を、当時の忠君体制の中に生きた軍人の生き方として客観的に理解することは重要であるが、その意味を自分の自我領域との接点内で捕らえるときは、それをナンセンスと解しようと、尊敬すべき行為と受け取ろうと、そのほかどのような意味に理解しようと、読む者の自由なのである」。

以上のような読書の心理的メカニズムは、親子の対話が直接的経験であるのに対し、間接的経験であるという相違はあるものの、刺激←→認知間のフィードバック機制は全く同一である。むしろ読書刺激の場合のほうが、親子の対話より阪本のいう個人的意味化による自我体系の発展を相手の意思による刺激の変化にわずらわされないという意味で、時間をかけてより自由に個性的に行えるともいえる。

活字刺激に対する認知構造は、言語的意味化→経験的意味化→個性的意味化（＝個性の強化）という過程をたどるが、満足はいく認知に達する過程ではスタートまでもどるか否かは別にして、つまり段階の差異はあるものの常にフィードバック機制が働き、このフィードバック機制こそ“思考そのもの”であり、活字文化はこの機制を心理的特性とするパーソナリティを形成する。

従って活字文化に対する以上のような思考的認知様式の継続的経験は、心理的に外的情報に対する瞬間的な反応を抑える反復思考的人格（いわゆる“思考人間”）すなわち、性格特性として、慎重で考慮深く、軽率さは少ないが一面考えすぎて決断の時をなくし、外的情報に対する瞬間的感覚的反応の弱い、たてまえに流れて行動力に欠く行動傾向を生じると思われる。

（2）映像文化について

A. 〈映像文化と心理的メカニズム〉

南（南博）はテレビによる映像文化とパーソナリティとのかかわりについて、「テレビによる人間変革は、まず、パーソナリティ形成の過程にあらわれる。パーソナリティ形成とは、こどものパーソナリティが成長につれて、構造と機能の上で、しだいに分化し、同時に統合されていくことである。そうして、この分化と統合に際して、こどもが周囲の環境から受けるさまざまな心理的影響の主力は、幼年期に家庭内で経験する心理関係にあると考えられる。」と述べ、昭和35年にすでにテレビによる人間変革を強調し、テレビの家庭内における心理的関係の役割の大きさを強調している。

人格形成を規定する要因分析

今日、性格形成における幼児期の家庭環境要因のもつ比重の大きさについては常識化さえされているが、それだけに人間変革の主体となっているテレビの映像文化が心理的に影響を与えるメカニズムを、活字文化と比較しながら明らかにしておくことは、本研究においては欠くことができない。

南は、テレビの映像刺激とこれに対する人間の反応様式のマカニズムについて、映像文化のもつ特有の特性を次のようにあげている。「ふつう、テレビ・コミュニケーションの送り内容は、映像に乗せられて、受け手の感覚器官に達する、といわれている。このばあい、テレビ映像では、視覚、聴覚の刺激材料から成り立つ静止画像、運動画像、活字像、音像の四つが組み合わされている。……右のような映像から成るテレビの送り内容は、こどものパーソナリティー形成に当って、パーソナルな保護者が送り出すコミュニケーション内容にくらべて、次のような質の相違をもっている。テレビの送り内容は、保護者のことばとちがって、パーソナルでない媒体から送られる。そこには、人間と人間の心理関係はなく、映像の刺激が外部から人間の内部に変化をひきおこしす、触発関係がある。」と述べ、映像刺激の“触発性”を強調している。

確かに、テレビによる外的情報の認知過程の心理的メカニズムを解明していくと、“感覚的触発性”をもっともその特徴としているようである。

つまり、南のいう先述のテレビの4つの視的、聴覚的情報としての刺激が人間の受容器官に送られてきた場合、受容された情報は、「感覚」から瞬間的思考過程を経て「瞬間的認知」に至る。そこには、外的刺激の客観的認知と、個性的・人格的認知の間の時間的差異は許されず、客観的認知、即個性的・人格的認知を強いられ、十分な時間をかけての知的、経験的適応のはいりこむ余地はない。

従って、一般に図式化されている、刺激→感覚→知覚→認知という認知の心理的過程について、感覚から認知までの間における刺激の再確認や、感覚→知覚→認知間のフィードバック(思考)は許されないのである。

しかも、テレビを通じて与えられる情報は瞬時にして変化していくため、刺激に対してそのような時間的余地を必要とする認知習慣—[(刺激←→知覚)のフィードバックのくり返し→認知]—しか身につけていないもの(徹底して活字文化の中で生育してきたような老人など)は、テレビによる情報認知にはついていけないのである。

従って、テレビの4つの映像刺激は、瞬間的感覚的反応を要求するため、個体は、思考反応よりもむしろ瞬間的反応として対応しやすい快、不快を主体とする情緒的反応形態をとらざるをえなくなる。

さらにテレビ文化による家庭内での親子の対話の減少は、一層この傾向を強めている。

乳幼児期における保護者と幼児の対話を通してコミュニケーションでの認知過程では、保護者(特に母親)は自分の与える情報(刺激)に対する幼児の認知の度合いを十分確認しながら、必要とあれば何度でもスタートの情報(刺激)にフィードバックして情報を幼児の認知能力に対応させて変化させていく。

南は、この関係を次のように述べている、「心理関係のシンボルでは、保護者の送るコミュニケーション内容は、あらかじめこどもに向けて考慮された、特定のものがあるが、ふつうである。それは、こどものパーソナリティー形成に意図的に向けられた、コミュニケーションである。賞も罰も、愛も憎しみも、こどものパーソナリティーになんらかの影響を

与えるために、あらかじめ配慮されているのである。」と。

幼児自体も認知が十分に満足できない場合は、情報の再確認や不明な点の解明（質問）を試み、刺激→感覚→知覚間のフィードバックをくり返しなが、(思考) 自己の満足する認知へ達しようとする。つまり親子の対話の中には「刺激と認知」間にフィードバックのメカニズムが存在（このメカニズムを成立させるために絶対必要なものは“時間”あるが）しており、この心理的メカニズムこそ、上記の南博の指摘する一人間と人間の心理関係一なのである。

母親と幼児がともどもにテレビのブラウン管をながめることによって親子の対話が減少し、(すでにテレビ人間化した若い母親はテレビをかけっぱなしで育児をする)、映像文化への適応様式を極端に身につけざるをえない家庭環境条件下では、親子の対話を通してのみ形成される反応様式とは全く異なった反応様式が形成されてくるわけである。

映像文化に対する以上のような感覚的認知様式の継続的経験は、心理的に外的情報に対する感覚的に鋭敏な、情緒的反応に偏った人格（いわゆる“感覚人間”）を形成する。すなわち感覚的、情緒的に鋭敏な反応様式は、性格特性としては、活動的で好奇心は旺盛だが、思考様式の単純な、調子に乗りすぎて軽薄な衝動的行動傾向となると考えられるのである。

B. 〈テレビの普及率と視聴時間〉

家庭におけるテレビ文化の子どもへの影響に関する科学的根拠は、主として (a) テレビの普及率、(b) テレビの視聴時間、(c) テレビ情報の内容（番組）から説明できるが、今回は、(a)、(b)、による。

家庭文化の影響を人格形成上もっとも強く受ける期間を、時実（時実利彦）の脳生理学的に脳の発達位相から考慮した場合、出産より10才前後までとすれば、本研究における活字群（生年、昭和30年前）が生後5年の年代は、昭和34年前である。

そしてこの当時のテレビの普及率は、表2が示すように、彼らが幼児期では0.01%～23.1%である。テレビのこの普及率からみた場合、活字群は乳幼児期にはほとんどテレビ文化の影響を受けてこなかったといってもよからう。従って視聴時間は問題にならない。

表2 テレビ放送受信契約<放送開始以降各年度別の増減数・現在数・普及率> (昭27年～50年度)

	年 度	増 減 数	現 在 数	普 及 率
テ レ ビ	放送開始当時		(866)	
	昭和 27	1,485	1,485	0.01
	28	15,294	16,779	0.1
	29	36,103	52,882	0.3
	30	112,784	165,666	0.9
	31	253,698	419,364	2.3
契 約	32	489,346	908,710	5.1
	33	1,073,669	1,982,379	11.0
	34	2,166,304	4,148,683	23.1
	35	2,711,789	6,860,472	33.2
	36	3,361,644	10,222,116	49.5
契 約 甲	37	3,156,857	13,378,973	64.8
	38	2,283,948	15,662,921	75.9
	39	1,469,169	17,132,090	83.0
	40	1,092,123	18,224,213	75.6
	41	1,022,329	19,246,542	79.8
	42	1,023,945	20,270,487	84.2
普 通 ・ カ ラ ー 契 約 合 計	43	950,246	21,220,733	88.1
	44	866,815	22,087,548	91.7
	45	731,019	22,818,567	94.8
	46	701,687	23,520,254	84.4
	47	913,209	24,433,463	87.0
	48	491,522	24,924,985	88.7
	49	828,411	25,753,396	91.7
	50	791,362	26,544,758	82.6

注. 普及率 (%)

昭和27～29年度は昭和25年10月の国勢調査世帯数 (16,580,129)

昭和30～34年度は昭和30年10月 " (17,959,923)

昭和35～39年度は昭和35年10月 " (20,656,234)

昭和40～45年度は昭和40年10月 " (24,081,803)

昭和46～49年度は昭和45年10月 " (28,093,012)

昭和50年度は 昭和50年10月 " (32,143,748)

により、それぞれ算出した。ただし、50年度は概数。

人格形成を規定する要因分析

表3. テレビ視聴時間の変化 NHK国民生活時間調査(昭和40, 45, 48, 50)

	平 日				土 曜				日 曜			
	40年	45年	48年	50年	40年	45年	48年	50年	40年	45年	48年	50年
全 国 民	2.52	3.05	3.13	3.19	3.01	3.07	3.26	3.44	3.41	3.46	4.07	4.11
10～15歳	2.22	2.06	2.19	2.11	2.57	2.53	3.01	3.09	3.54	3.42	3.54	3.44
16～19歳	2.10	2.15	2.17	2.17	2.31	2.36	2.56	2.55	3.38	3.24	3.50	3.49
20代	2.52	2.53	3.07	3.09	2.51	2.50	3.08	3.29	3.38	3.28	3.58	4.05
30代	3.06	3.13	3.11	3.22	3.02	2.58	3.24	3.49	3.33	3.42	4.04	4.06
40代	2.59	3.07	3.20	3.19	3.05	3.07	3.21	3.46	3.30	3.43	4.01	4.13
50代	3.16	3.34	3.41	3.53	3.17	3.38	3.46	4.09	4.05	4.17	4.17	4.31
60代	3.16	4.01	4.13	4.18	3.26	3.52	4.22	4.45	3.29	4.20	4.47	4.57
70歳以上	2.46	4.11	4.21	4.38	3.11	4.05	4.31	4.27	3.26	4.07	4.42	4.43

表4の1. テレビの視聴時間

	小 6			中 2		
	全	性		全	性	
		男	女		男	女
	832人	418人	414人	820人	431人	389人
1時間未満	5%	3%	7%	7%	6%	7%
1時間以上～2時間未満	20	15	25	27	27	27
2時間以上～3時間未満	28	31	26	33	32	34
3時間以上～4時間未満	23	26	21	20	20	20
4時間以上	21	24	18	13	14	11

表4の2. 子供の生活時間(小・中学生) 1975年(昭和50年)10月

行動の種類	小学生	中学生
	(10歳以上)	
	全体の	全体の
	平均時間	平均時間
	(時間分)	(時間分)
睡眠	9.19	7.47
食事	1.33	1.23
身のまわりの用事	53	58
仕事	02	04
学業	7.09	9.32
(授業・学校の行事)	5.26	5.59
(課外活動・自宅学習)	1.43	3.33
家事	20	25
(炊事)	03	04
(そうじ)	03	04
(洗たく)	00	01
(実用品の買物)	05	06
(家庭雑事)	07	09
交際	05	09
休養	20	24
レジャー活動	1.21	33
(見物・鑑賞)	02	04
(スポーツ)	16	10
(けいこごと・趣味)	05	06
(子供の遊び)	54	09
移動	52	53
新聞・雑誌・本	21	21
(新聞)	02	03
(雑誌・本)	20	18
ラジオ	01	24
テレビ	2.20	2.02

表5. 小学校における授業時数

区分	各教科の授業時数								道徳の授業時間数	特別活動の授業時数	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	音楽	図画工作	家庭	体育			
第1学年	272	68	136	68	68	68	—	102	34	34	850
第2学年	280	70	175	70	70	70	—	105	35	35	910
第3学年	280	105	175	105	70	70	—	105	35	35	980
第4学年	280	105	175	105	70	70	—	105	35	70	1,015
第5学年	210	105	175	105	70	70	70	105	35	70	1,015
第6学年	210	105	175	105	70	70	70	105	35	70	1,015

表6. 中学校における授業時数

区分	必修教科の授業時数								道徳の授業時間数	特別活動の授業時数	選修に充てる授業時数	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	家庭・技術				
第1学年	175	140	105	105	70	70	105	70	35	70	105	1,050
第2学年	140	140	140	105	70	70	105	70	35	70	105	1,050
第3学年	140	105	140	140	35	35	105	105	35	70	140	1,050

「教育学大辞典3」(第1法規)1978年9月発行

NHK「国民生活時間調査」1975年(昭和50年)小学生(10歳以上)287人,中学生266人

これに対し、映像群のテレビ文化の影響はどうであろうか。

映像群の生年が37年であるため、生年時にすでにテレビの普及率は50%を超え（昭和37年、64.8%）、昭和47年には、87%に達しているのである。

しかも視聴時間は表3が示すように、昭和40年以降は、確実に平日は2時間以上、土・日曜日は1日に3時間以上にも上っている。

映像群が小学校2年生ないしは3年生の時のテレビの視聴時間は、NHK総合放送文化研究所の実態調査（昭和42年11月～12月、静岡市の小学3年、4年、中学1年とその母親8,577人を対象）では、平日は2時間21分、土曜日は2時間52分、日曜日になると4時間2分に達している。これは学校にいつている時間、睡眠時間などを除いた子どもの余暇時間の75%になる。

ちなみにNHK（NHK放送世論調査所）が昭和54年8月に行った調査によれば、小学校6年生、中学校2年生のテレビの視聴時間は表4の1のとおりであり（平均平日視聴時間2時間11分、土曜、日曜の長視聴時間との平均をとれば1日平均約2時間30分である。テレビ視聴のこの時間は、昭和40年代とほとんど同じである。参考までに、昭和50年の子どもの生活時間は表4の2のとおりである。）、1年間では912時間30分となる。

これを表5、6の小・中学校の総授業時間数（学校教育法施行規則に総授業時間数は、小学校6年生で1,015時限、中学校は1,050時限。ただし1時限は45分であるから、それで換算すると、実際の時間は、小学校6年生で761時間15分、中学生では787時間30分となる）と比較すると、年間累計では、小6・中2ともテレビの視聴時間が学校の総授業時間数を大きく上回っている。

テレビという映像文化の家庭内において占める役割の大きさは想像以上であろう。

2. 研究結果と考察

(1) 活字文化から映像文化への推移が性格形成に与えた影響(1) — [12の性格因子] 別

1) まずY G性格検査の構成因子とその意味づけを行っておきたい。Y G検査を作成した辻岡（辻岡美延）は、Y G検査によって測定される12の性格特性を次のように記述している。

Depression :

たびたびゆううつになる、理由もなく不安になることがあるなどの、陰気な、悲観的気分や、罪悪感の強さを示す特性。

Cyclic Tendency :

気が変わりやすく、感情的で、物事に驚きやすい情緒不安定、気分変易性の強さを示す特性。

Inferiority Feelings :

劣等感に悩まされ、自信の欠乏など自己の過小評価、不適応感の強さを示す特性。

Nervousness :

神経質で心配性、いらいらするなどの、ノイローゼ気味の強さを示す特性。

Lack of Objectivity :

ありそうもないことを空想する、ねつかれないなどの空想性、過敏性、主観性の強さを示す特性。

Lack of Cooperativeness :

人格形成を規定する要因分析

不満が多い、人を信用しないなどの不満性と不信性の強さを示す特性。

Lack of Agreeableness :

気が短い、正しいと思うことは人にかまわず実行する、人の意見をききたがらないなど、攻撃的な強さを示す特性。この特性は、情緒不安定特性（D, C, I, N）と結合すると、社会的にも活躍する社会的活動性となる。

General Activity :

仕事が速い、動作がきびきびしているなどの肉体、精神面の両方にまたがる強さを示す特性。

Rhathymia

人といっしょにはしゃぐ、何時も何か刺激を求めるなどの気がるな、のんきな、衝動的な強さを示す特性。

Thinking Extraversion :

これは深く物事を考えたり、たびたび考え込むくせがあるなどの、思索的、瞑想的、反省的熟慮性傾向とは逆方向の、考えが大ざっぱでのんきな傾向の強さを示す特性。

Ascendance :

会やグループのために働くなど、引っ込み思案でない、積極的な社会指導性、リーダーシップの強さを示す傾向。

Social Extraversion :

誰とでもよく話す、人と広くつきあうのが楽しみであるなど、社会的に対人接触を好む、対人的に外交的、社交的、社会的接触を好む強さを示す特性。

しかし、企業経営における性格検査の必要性から、YG検査の実践的臨床性を活用している江口（江口恒男）は、辻岡の上記の性格特性の表現用語のうち、抑うつ性（D因子）、客観的（O因子）、のんき性（R因子）等の因子の解釈上のあいまいさと各特性因子のもつ内容表現の不備を指摘し、次のような手続きによって、図表的に性格特性をまとめている。

すなわち、各因子の質問項目別に、得点の高得点〈A〉と低得点〈B〉の場合について、それぞれの項目のもつと思われる性格特性の特徴を氏独自の語句の表現によってより明確化し（表7、8）、各因子得点の高低に従って、彼によって設定された40の特性の中での出現度に基づき、実際上の性格診断を解釈的な面から、より容易にしようとしている（図表1、2）。

江口のこの図、表は、本研究の結果の考察において、大いに参考となると思われるのでここに引用しておきたい。

表7. 得点による性格特性の特徴

	<A> 高得点の際の特徴	 低得点の際の特徴
D	神経のつかれがひどく、虚脱して“やる気”がおきない心境。	何の心配もなく、元気で満ち足りた心境。楽観的自己満足。
C	些細なことが気になって、気分が動揺している。心配症である。	平静かつ安定した心境で、心配症ではない。
I	自身がないピクピクして優柔不断な心境。	自信に満ち、明るく積極的な心境。自信家。
N	神経がいらだち、不満が多い心境。	晴ばれとして開放的、神経質ではない。
O	些細なことが気になって仕方がない、不安定でイライラした心境であり、冷静客観的に物事が判断できない。	穏健で満ち足りた、快適な心境であり、冷静に常識的に現実を直視し、ドライに判断を下すことができる。
Co	現在の自分は不遇（不運）な、満足できない心境にあり、他人を信用する気持ちには到底なれない対人不信感が強い。	満ち足りた幸福な心境。善意協調的だが、ときには他人との協調に気をつかひすぎることもある。
Ag	活動的で好奇心も旺盛。強い自尊心に支えられてテキパキと決断し行動する。不正に対しては断固として糾弾し、時には攻撃的に怒ることもある。	自己卑下が強く、とかく事なかれ主義の保守的姿勢をとりがちである。怒るべきときにも怒れず、ファイトがわからない。
G	自分は敏腕で能率がよい、という自信に支えられて、現在の心境は極めて快適である。周囲の人との人間関係も非常によい。行動的（活動的）。	「自分は不器用で能率が悪い」という意識が、当人を陰気にし、行動を不活発にしている。どちらかという無理が多い。
R	活動的で好奇心も旺盛だが、調子に乗り過ぎて軽薄な行動に走ることもある。軽率（向こうみず）。	必要以上に慎重で、優柔不断である（決断力が弱い）沈滞ムードで、陽気な気分にはほとんど遠い心境。
T	万事楽観的で容易に妥協しやすく、思い悩むようなことはない。少し用心深さが足りないようである。無頓着（のんき）。	悲観的で些細なことを気にしすぎる。クヨクヨ考えすぎて行動も不活発である。
A	自信家で、どちらかというとお節介やきである。指導者意識が強く、多弁で、活発に行動する。自己顕示欲。お山の大将。	自信がなく、引っ込み思案である。他人に引きづられることが多い、指導者意識は弱い。
S	社交的かつ派手好きで、口数も多い。誰とでも気軽に話し、くったくがない。	口数が少なく、人嫌い（非社交的）であり、性格は地味。引っ込み思案で、自信もない。

表8. 因子別性格特性の要約

低スコアの性格特性		高スコアの性格特性	
d	自己満足、楽観的	D	元気がない、虚脱し（やる気をなくし）やすい
c	心配性ではない	C	心配性、気が小さい（小心）
i	自信が強い、自信家	I	自信欠如、劣等感
n	神経質ではない	N	神経質、不満をもちやすい
o	現実主義的、ドライ、常識的	O	現実ばなれをした考え方、分裂思考
co	他人との協調に気をつかう	Co	対人不信感、他人が信用できない
ag	自己卑下、ファイトがない、怒れない	Ag	自尊心、攻撃的、怒りやすい（怒りっぽい）
g	理屈っぽい、幻滅感がある	G	行動的（活動的）、キビキビ動く
r	慎重すぎる、決断力が弱い	R	気軽、軽率、向うみず
t	些細なことを考えすぎる（気にしすぎる）	T	無頓着（のんき）、安易に妥協しやすい
a	引っ込み思案、指導者意識が弱い	A	指導者意識、自己顕示欲、お山の大将
s	社交性が低い、人嫌いの傾向	S	社交的、派手好き

人格形成を規定する要因分析

図表 1. 性格因子の特性 (高得点)

No.	特 性	因子	D	C	I	N	O	Co	No.	特 性	因子	Ag	G	R	T	A	S
1	虚 脱 感		●				◎		19	活 動 的		○	○	○	○	○	
2	自 信 欠 如		○		●	○			20	果 断 (決 断)		○					
3	神 經 質		○		○	●	◎		21	攻 撃 性		◎					
4	倦 怠 感		○						22	衝 動 性		○					
5	閉鎖的 (悲 観)		○						23	自 尊 心		●					
6	小 心 (心 配 症)			●	○	○	◎		24	短 気		○					
7	集 中 力 欠 如			○					25	好 奇 心 旺 盛		○		○			
8	お 天 気 屋			○			◎		26	協 調 性			○				
9	感 情 的			○					27	敏 腕 (高 能 率)			◎				
10	消 極 的				○				28	快 活 (楽 天 的)			◎	○			
11	優 柔 不 断				○				29	順 応 的			○				
12	劣 等 感				○				30	多 弁 (お 喋 り)				○		○	○
13	事 な か れ 主 義						◎		31	軽 卒 (気 軽)				●	○		
14	ロ マ ン チ ス ト						◎		32	開 放 的 (楽 観)					○		○
15	分 裂 傾 向						◎		33	非 思 索 的			○		●		
16	対 人 不 信 感							●	34	無 頓 着 (の ん き)					◎		
17	不 運 (不 遇) 感							○	35	自 己 顕 示							●
18	不 満 感				○			○	36	世 話 好 き						○	
〔注〕各因子が高得点 (右寄り) の時, ●◎○印の傾向を示す。ただし●は最も現れやすい傾向, ◎は次に現れやすい傾向を意味している。									37	自 信 家						○	○
									38	指 導 的						○	
									39	社 交 的							●
									40	派 手 好 き							○

図表 2. 性格因子の特性 (低得点)

No.	特 性	因子	d	c	i	n	o	co	No.	特 性	因子	ag	g	r	t	a	s
1	充 実 感		●				◎		19	行 動 不 活 発		○	○	○	○	○	
2	自 信 家		○		●	○			20	優 柔 不 断		○					
3	楽 天 的		○		○	●	◎		21	事 な か れ 主 義		◎					
4	元 気		○						22	慎 重		○					
5	開 放 的 (楽 観)		○						23	自 己 卑 下		●					
6	大 胆 (安 心 感)			●	○	○	◎		24	気 長		○					
7	集 中 力 旺 盛			○					25	現 状 維 持 的		○		○			
8	穩 健			○			◎		26	非 協 調 的			○				
9	冷 静			○					27	不 器 用 (非 能 率)			◎				
10	積 極 的				○				28	陰 気 (幻 滅 感)			◎	○			
11	果 断 (決 断)				○				29	批 判 的			○				
12	優 越 感				○				30	無 口				○		○	○
13	攻 撃 性						◎		31	熟 慮 (重 厚)				●	○		
14	現 実 主 義						◎		32	閉 鎖 的 (悲 観)					○		○
15	安 定 的						◎		33	思 索 的			○		●		
16	協 調 的 (善 意)							●	34	警 戒 心					○		
17	幸 運 感							○	35	引 込 み 思 案							●
18	満 足 感					○		○	36	不 干 渉 主 義						○	
〔注〕各因子が低得点 (左寄り) の時, ●◎○印の傾向を示す。ただし●は最も現れやすい傾向, ◎は次に現れやすい傾向を意味している。									37	自 信 欠 如						○	○
									38	非 指 導 的						○	
									39	非 社 交 的							●
									40	地 味							○

2) 結果：各因子の年度別・時代区分別因子得点（得点は平均得点）、および得点分布図
各因子の得点を年度別・時代区分別に算出したものが表9～表20であり、これを図形化した
ものが、図1～図12である。（ ）内は標準偏差。

表9の1. D因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	11	11	11	11	11	13	12	12	12	12	12	12	11	11
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	11	11	10	11	10	11	11	11	10	10	11	11	10	10

表9の2. D因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	11.7(5.1)	11.5(5.1)	10.5(5.4)

表10の1. C因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	10	11	11	11	11	11	11	11	10	11	10	11	11	10
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	10	12	10	11	10	10	11	10	10	10	11	11	10	11

表10の2. C因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	11.0(4.6)	10.8(4.6)	10.4(4.7)

表11の1. I因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	7	9	8	9	9	9	9	10	9	10	10	10	9	9
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	9	10	10	10	9	9	10	9	10	9	10	10	9	11

表11の2. I因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	9.1(5.0)	9.6(4.9)	9.7(5.0)

表12の1. N因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	10	10	9	9	10	11	11	11	11	10	10	11	9	10
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	9	10	10	10	9	10	10	9	10	9	10	10	9	10

表12の2. N因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	10.2(5.0)	10.0(4.8)	9.7(4.9)

表13の1. O因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	9	9	8	9	9	10	9	10	9	10	9	10	9	9
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	8	9	8	9	9	9	9	9	9	9	10	10	10	9

表13の2. O因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	9.4(3.9)	9.1(3.8)	9.1(3.8)

表14の1. Co因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	7	7	7	7	7	8	7	8	8	7	6	7	6	7
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	6	7	6	7	6	6	7	7	7	7	7	7	6	7

表14の2. Co因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	7.1(3.9)	6.7(3.8)	6.6(3.7)

表15の1. Ag因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	12	11	11	11	11	11	11	11	11	11	10	10	11	11
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	10	11	11	11	11	10	11	11	10	11	11	11	11	10

表15の2. Ag因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	10.9(4.0)	10.4(4.1)	10.7(3.9)

表16の1. G因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	12	12	12	11	11	11	11	10	11	11	10	10	12	11
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	11	11	11	11	11	11	11	11	11	11	12	11	11	10

表16の2. G因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	11.2(4.6)	10.8(4.4)	10.9(4.4)

表17の1. R因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	10	11	11	11	11	11	11	11	11	12	12	11	12	12
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	11	12	12	12	11	11	12	12	12	12	13	13	12	12

表17の2. R因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	11.0(4.5)	11.6(4.4)	12.1(4.2)

表18の1. T因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	11	9	9	9	9	9	9	9	9	9	10	9	10	9
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	9	10	9	9	10	9	10	10	9	10	9	9	9	10

表18の2. T因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	9.1(4.3)	9.4(4.2)	9.5(4.2)

表19の1. A因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	10	9	10	9	9	9	9	9	9	9	9	9	10	11
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	11	10	10	10	11	10	10	11	10	11	11	10	11	10

表19の2. A因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	9.2(5.0)	10.0(4.9)	10.4(4.7)

表20の1. S因子の各年度別得点

年度	S.39	S.40	S.41	S.42	S.43	S.45	S.46	S.47	S.48	S.49	S.50	S.51	S.52	S.53
得点	9	12	12	11	12	11	12	12	12	13	13	13	13	13
	S.54	S.55	S.56	S.57	S.58	S.59	S.60	S.61	S.62	S.63	H.1	H.2	H.3	H.4
	14	13	13	14	14	14	13	14	14	14	14	14	14	13

表20の2. S因子の時代区分別得点

年 度	S.39～S.49	S.50～S.55	S.56～H.4
時代区分	活字文化期	移行期	映像文化期
得 点	11.9(4.9)	13.1(4.8)	13.7(4.7)

人格形成を規定する要因分析

図1の1. D因子の各年度別得点分布

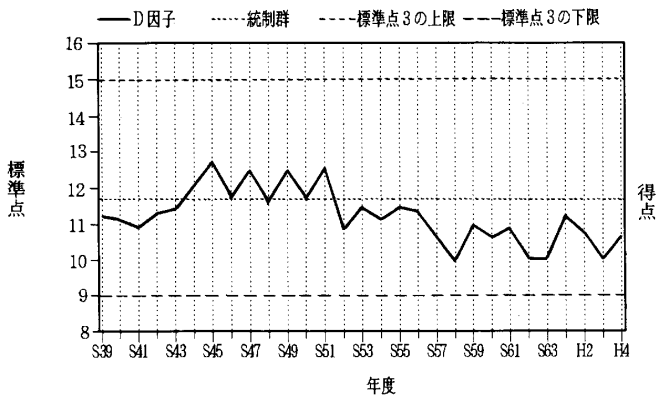


図1の2. 時代区別D因子の平均得点

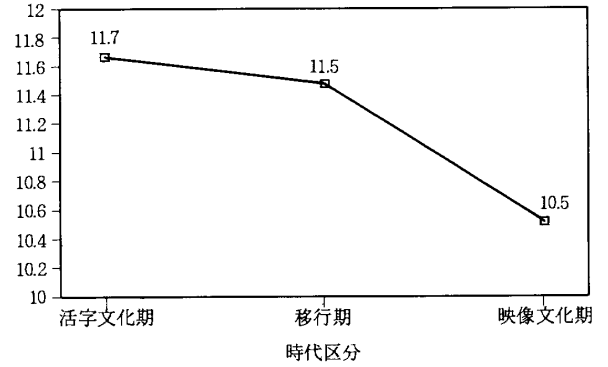


図2の1. C因子の各年度別得点分布

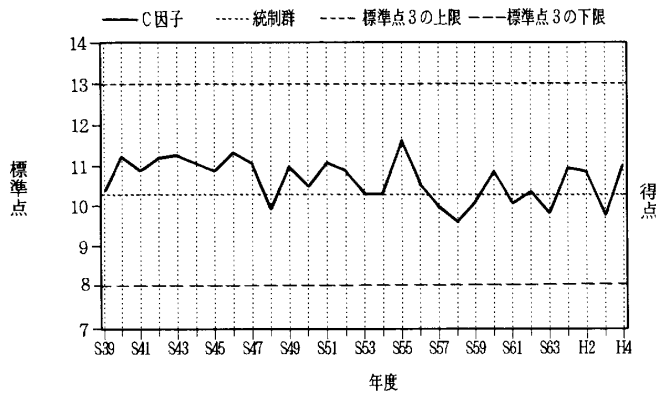


図2の2. 時代区別C因子の平均得点

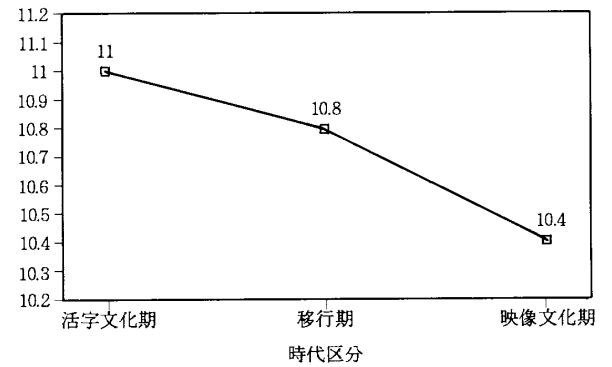


図3の1. I因子の各年度別得点分布

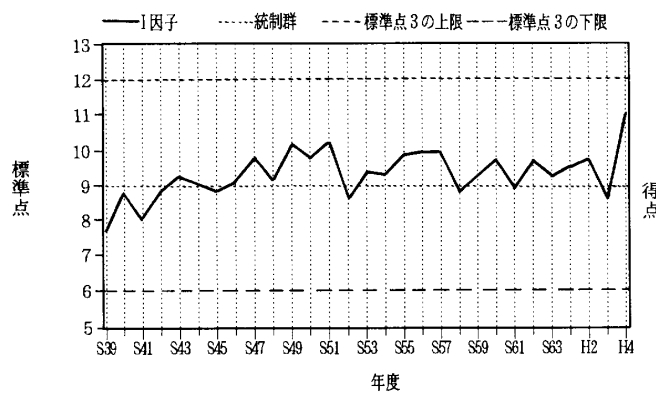


図3の2. 時代区別I因子の平均得点

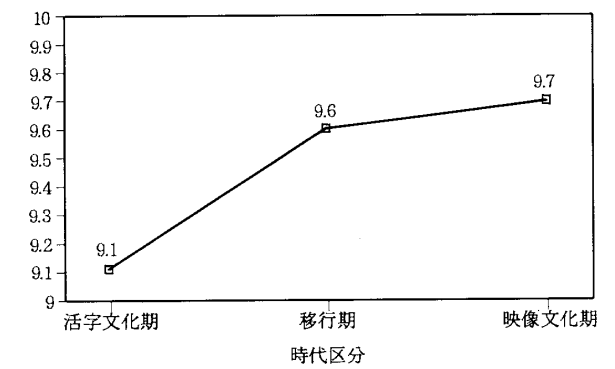


図4の1. N因子の各年度別得点分布

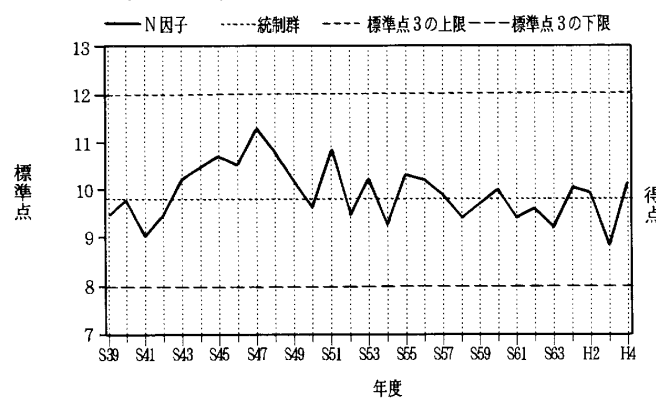


図4の2. 時代区別N因子の平均得点

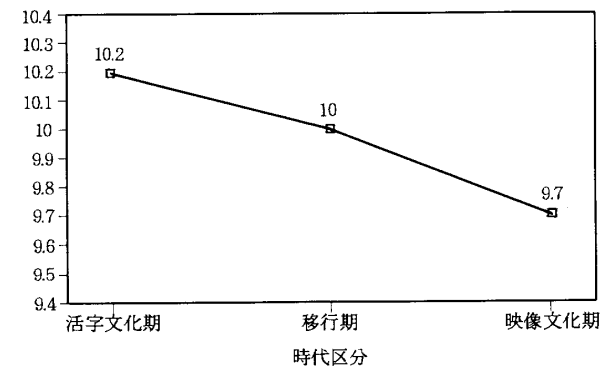


図5の1. O因子の各年度別得点分布

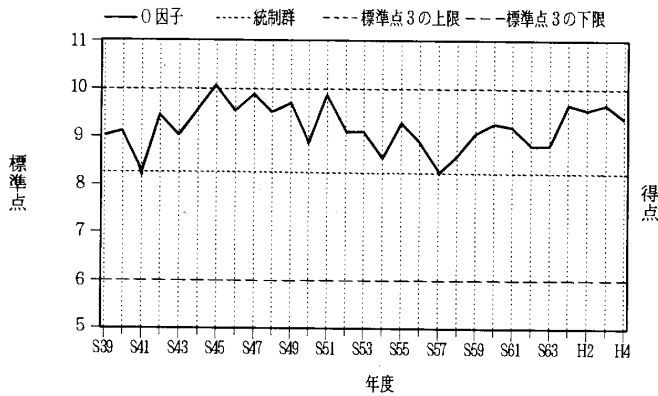


図5の2. 時代区分別O因子の平均得点

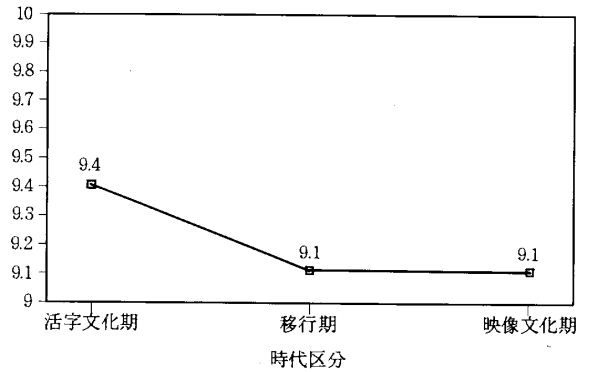


図6の1. Co因子の各年度別得点分布

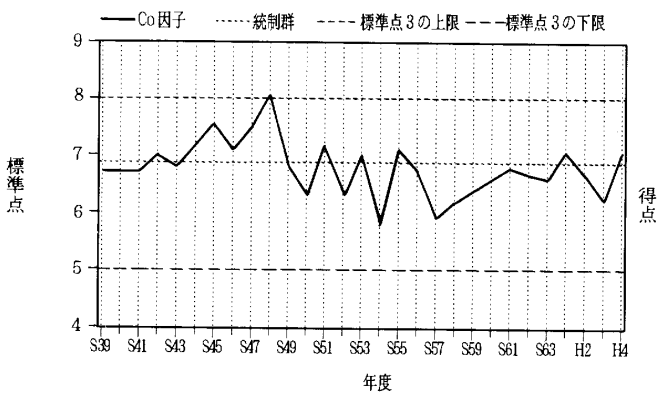


図6の2. 時代区分別Co因子の平均得点

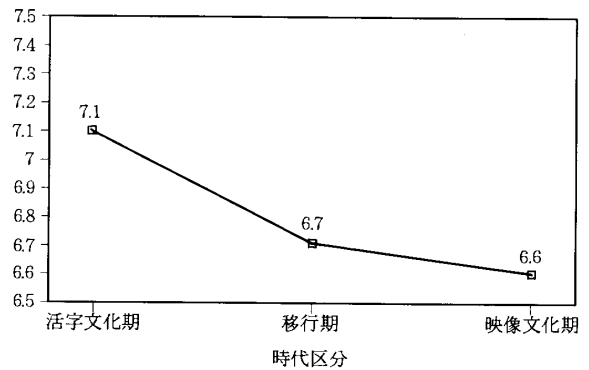


図7の1. Ag因子の各年度別得点分布

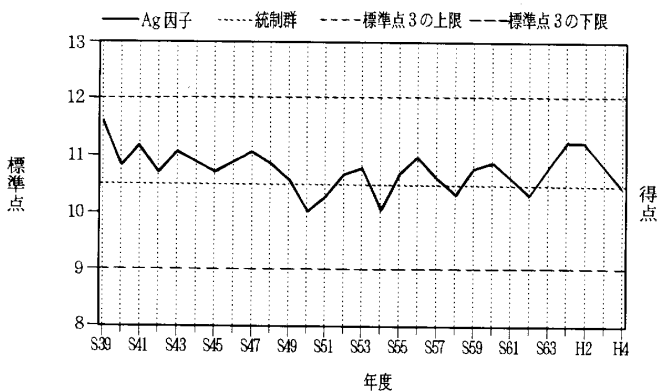


図7の2. 時代区分別Ag因子の平均得点

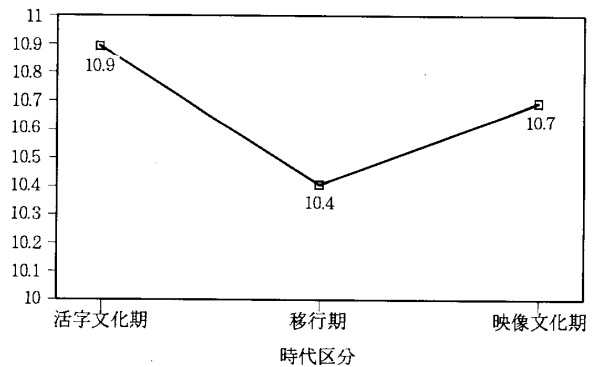


図8の1. G因子の各年度別得点分布

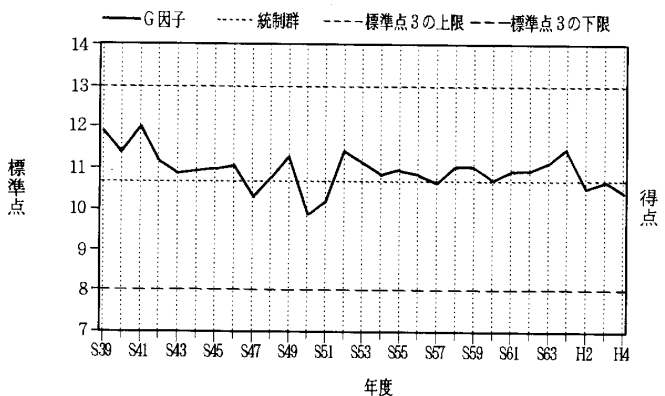
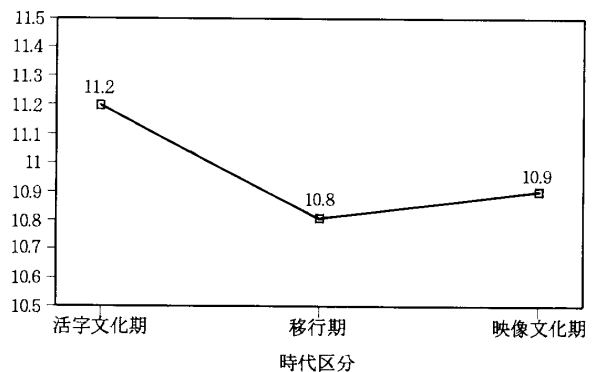


図8の2. 時代区分別G因子の平均得点



人格形成を規定する要因分析

図9の1. R因子の各年度別得点分布

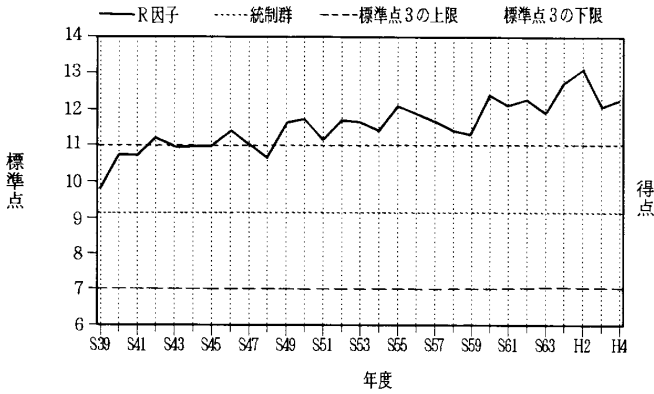


図9の2. 時代区別R因子の平均得点

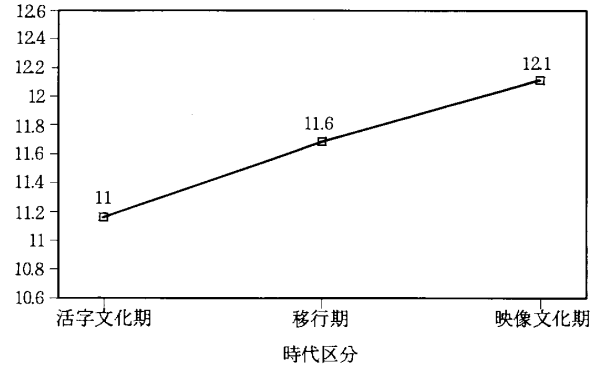


図10の1. T因子の各年度別得点分布

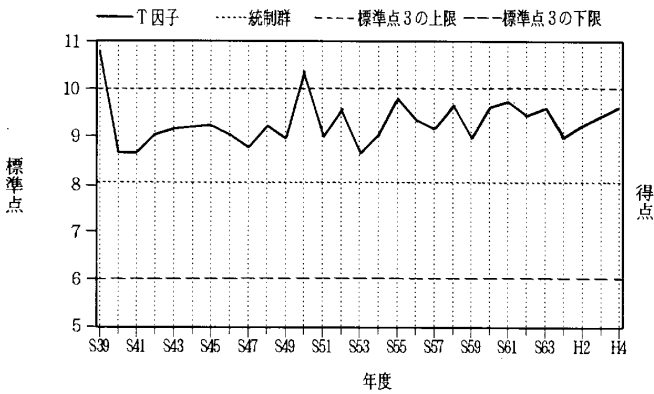


図10の2. 時代区別T因子の平均得点

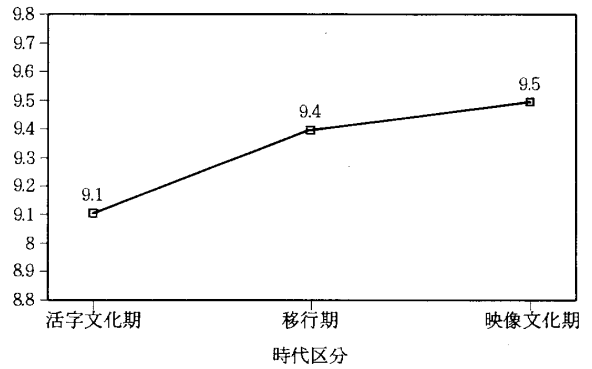


図11の1. A因子の各年度別得点分布

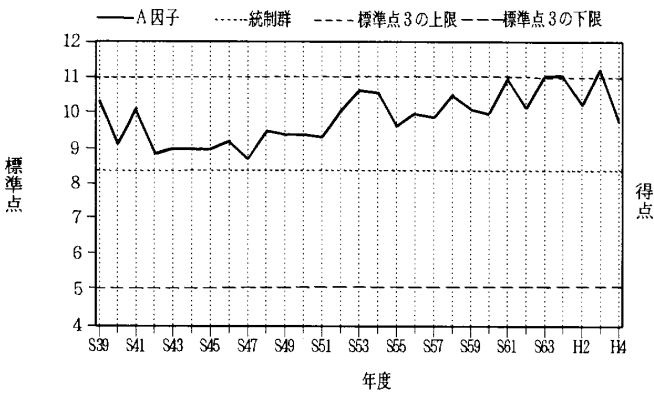


図11の2. 時代区別A因子の平均得点

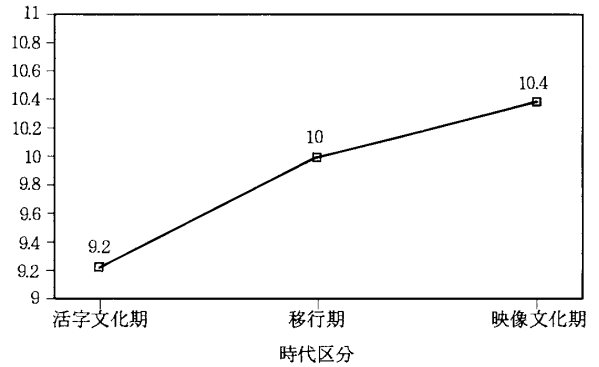


図12の1. S因子の各年度別得点分布

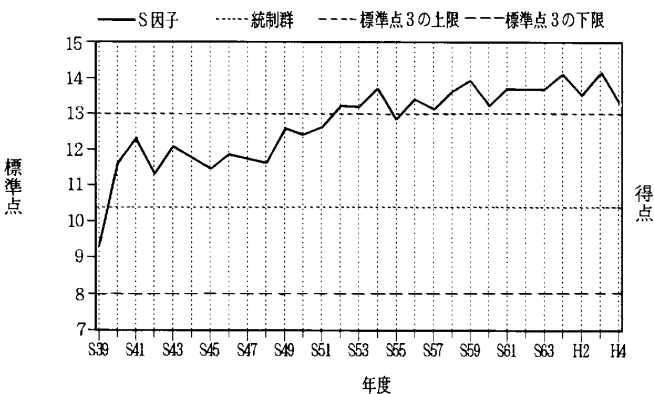
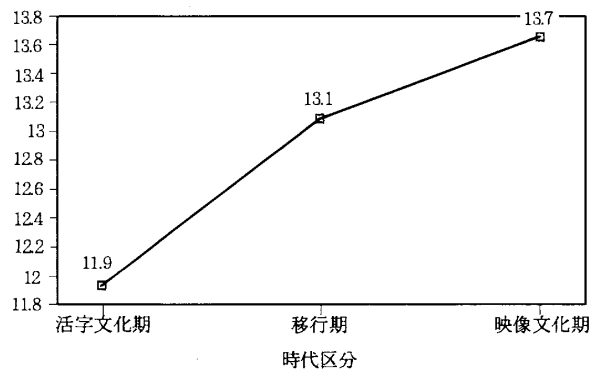


図12の2. 時代区別S因子の平均得点



3) 結果の考察

表21は、性格因子毎の時代別得点の一覧である。

表21. 12性格因子の時代別得点

	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
統制群	11.7	10.3	9.0	9.8	8.4	6.9	10.5	10.7	9.1	8.1	8.4	10.4
活字群	11.7	11.0	9.1	10.2	9.4	7.1	10.9	11.2	11.0	9.1	9.2	11.9
移行群	11.5	10.8	9.6	10.0	9.1	6.7	10.4	10.8	11.6	9.4	10.0	13.1
映像群	10.5	10.4	9.7	9.7	9.1	6.6	10.7	10.9	12.1	9.5	10.4	13.7
3群間	***	***	**			***			***	*	***	***
活・映群	**	**	**	*		**			**	*	**	**

***: $P < 0.01$ **: $P < 0.025$ *: $P < 0.05$

統制群: 資料の相対的比較のため、YG検査標準化において用いられたYG検査一般女子大学生YG検査得点(注)を統制群として提示した。

活字期、移行期、映像期の3群の分散分析の結果、D, C, I, Co, R, T, A, Sの各因子に、時代間に有意な差が見いだされた。

① このうち、D, C, Co, R, A, S因子は1%以下の水準で3つの時代間に時代を追って明確な変化がみられた。なおD, C, Co因子においては得点の減少を、R, A, S因子においては、得点の上昇という変化の一定傾向が生じている。

このことは、D因子(抑うつ性)の得点の減少(11.7→10.5)は、楽観的、自己満足間の増加を示し、C因子(気分の変化)の得点の減少(11.0→10.4)は、心配性、苦労性の減少を示し、Co因子(非協調性)の得点の減少(7.1→6.6)は、協調性、他人への関心の高まりを示している点からみて、性格における情緒性・社会性の面では、前記の江口恒夫の性格因子解釈基準によれば、物事を余り苦しめない、生活を楽観的にエンジョイし、他人との協調に気を使う、人の善い性格が形成される傾向にあることを意味しているといえよう。

反面、自己罪悪感が薄くなり、罪悪への配慮が減少し、他人の意向を常に気にする、“ご一同様症候群”的性格の形成を意味するともいえる。

ただ、情緒面では、I因子(劣等感)のみは、逆に得点は増加(9.1→9.6)し、自信がなくビクビクとした優柔不断な自信欠如型の性格傾向が増え、“ご一同様症候群”の発生をさらに裏付けている。

続いて、R因子(のんきさ、衝動性)の得点の増加(11.0→12.1)は、軽率で向こうみずな傾向の増加を示し、T因子(思考的外向)の得点の増加(9.1→9.5)は、物事に無頓着な傾向の増加を示し、A因子の得点の増加(9.2→10.4)は、支配性と自己顕示性の増加を示し、S因子(社会的外向)の得点の増加(11.9→13.7)は、社交的傾向の増加を示している。

この結果は、好奇心が旺盛であるが、やや用心深さの欠けた、調子に乗り過ぎて軽薄な行動に走り、自己顕示欲や指導意識の強い、社交的かつ派手好きで、口数が多く、誰とでも気軽に話す傾向の性格が形成されてきているといえる。

② 活字文化、映像文化のもつそれぞれの心理的メカニズム(前述)から、性格形成上特に

強く影響を受けると推測されるY G検査の性格因子は「D因子（抑うつ性）、R因子（衝動性）とT因子（思考的外向）」であろうと思われる。すなわち、映像文化においては、外的刺激に対する思考不足に伴う瞬間的な「感覚反応」の優位性は“活動的で好奇心も旺盛だが、調子に乗り過ぎて軽率な行動に走りやすい衝動性の強い性格”を形成すると予測されるが、結果はまさしくこの予測を検証している。

③ 昭和39年から平成4年までの約30年間においてY G検査の12の性格因子のうち、得点で有意な変化がみられなかった因子は、O因子（主観性）、Ag因子（攻撃性）、G因子（活動性）の3因子のみであり、9つの因子については、その得点は時代の推移によって一定の傾向をもって（特にD, R, A, S因子は大きく）変化している。これらの結果は、多くの性格形成規定要因が考えられるが、活字文化から映像文化への推移という、家庭における文化的環境要因の変化によって、形成される性格が強く規定されることを明確に示していると言える。

（2）活字文化から映像文化への推移の性格形成に与えた影響— [性格類型] 別

1) 「性格類型（A～F型）」とその意味づけ

Y G性格検査を作成した辻岡は、Y G検査によって測定された12の性格特性の得点傾向によって5つの性格類型を構成しているが、簡略に表現すると次のようにまとめられる。なお、本稿中の「F型・混合型」は、「F型」はそれぞれの型には準じているが、明確に準型に属さないものであり、「混合型」は全型の混合である。

[A型] (平均型)

この型は全尺度が平均またはそれに近いものであり、Average Type（ありふれ型）の頭文字をとってA型とよぶ。Y G検査の12尺度からみて取りたてて特徴のある性格を示さない平凡なタイプである。

[B型] (右寄り型) —不安定不適応積極型—

この型は、情緒不安定、社会的不適応、活動的、外向的で性格の不均衡が直接外面にあらわれやすいものであり、このため反社会的行動に出やすく、環境の不遇や知能の低いときは非行に向かいやすい傾向をもち、ブラスト・タイプBlast Type（暴発型）・B型とよぶ。

[C型] (左寄り型) —安定適応積極型—

この型は情緒的安定、社会的適応、消極的内向性でおとなしい、問題をおこさない安定消極型タイプであり、Calm Type（鎮静型）・C型とよぶ。

[D型] (右下がり型) —安定積極型—

この型は情緒的安定、社会的には適応または平均、活動的積極的外向的でいわば性格の良い面が外部にあらわれやすいタイプで、万事につけて良好、調和的、適応的安定的な行動をとりDirector（代表者）・D型とよぶ。

[E型] (左下がり型) —不安定不適応消極型—

この型はD型と反対のタイプで、情緒不安定、社会的不適応、非活動的、消極的内向的な性格で、性格の悪い面が内向するタイプで、ノイローゼ傾向におちいりやすく、情緒的な問題をもつEccentric Type（変わり者型）・E型とよぶ。

2) 性格類型の時代別出現率の推移とその考察

表22、および図13～図18は、Y G検査の各性格類型が時代によってどのように出現したかを示すものである。

表22. 性格類型の時代別出現率

数字は人数. ()内は%

	A 型	B 型	C 型	D 型	E 型	F 型	混合型	合計
活字文化期	264 (23.5)	189 (16.8)	69 (6.1)	223 (19.8)	139 (12.4)	38 (3.4)	203 (18.0)	1,125
移行期	173 (22.9)	115 (15.2)	46 (6.1)	172 (22.7)	79 (10.4)	31 (4.1)	141 (18.6)	757
映像文化期	310 (21.2)	267 (18.3)	61 (4.2)	364 (24.9)	122 (8.4)	55 (3.7)	282 (19.3)	1,461
※ ※			※	※※	※※			

※※ : P < 0.01 ※ : P < 0.05

図13. 性格類型の時代別変化

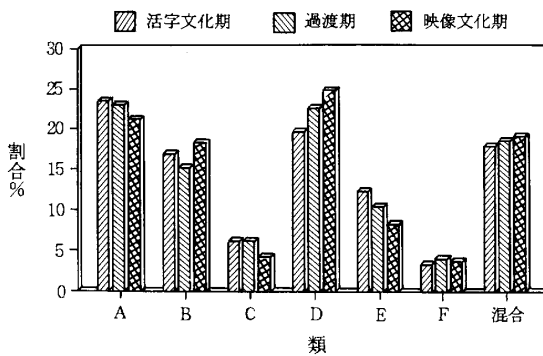


図14. 性格類型 [A型] の時代別変化

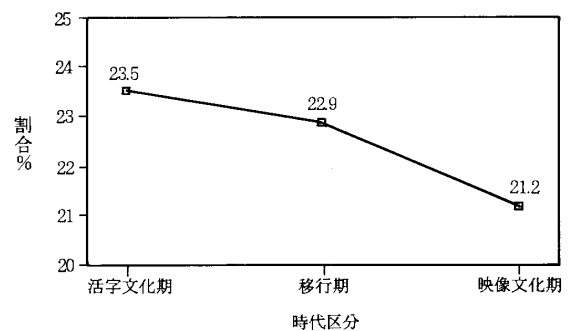


図15. 性格類型 [B型] の時代別変化

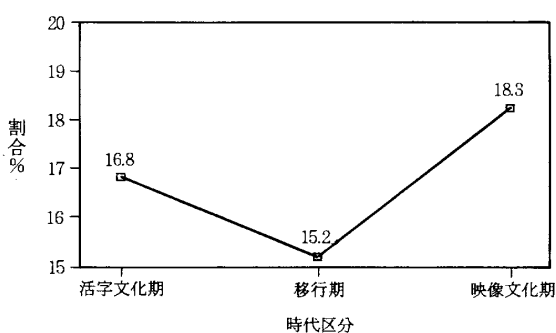


図16. 性格類型 [C型] の時代別変化

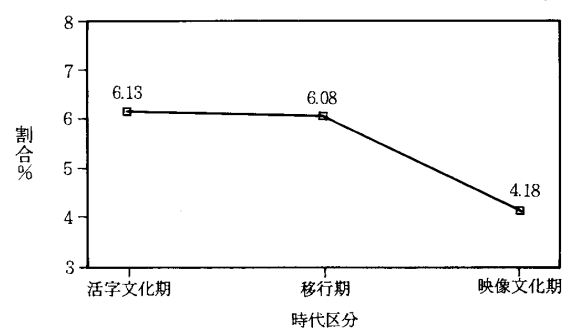


図17. 性格類型 [D型] の時代別変化

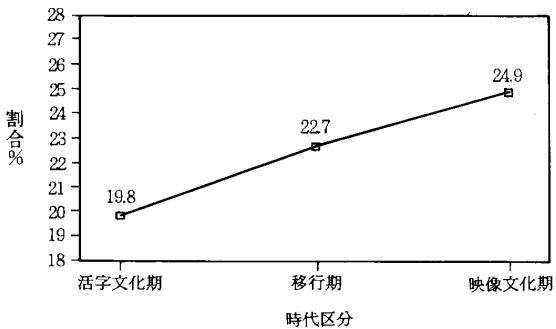
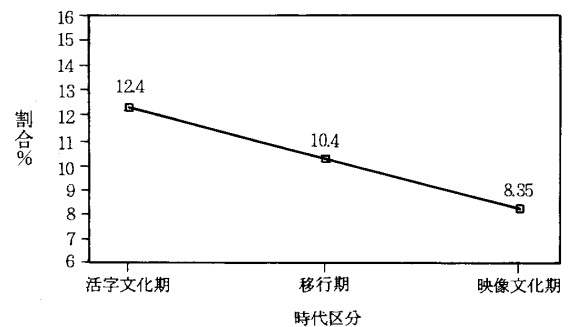


図18. 性格類型 [E型] の時代別変化



人格形成を規定する要因分析

上記の結果から次のことがいえるであろう。

① 3つの時代の各類型の独立性の検定では、1%の水準で有意であったが、性格全体の総合的な性格には、表22に示されているように、時代間によってそれほど飛び抜けて大きな変化は生じていない—性格類型[A・B・F・混合型]の割合は有意な差は生じていない。

② しかし前述の『性格特性因子』別では、部分的にかなりの性格特性に関して時代的变化が生じていたように、『性格類型』についても部分的には一定の変化がみられる。

特に[D型]の性格類型は、活字文化期から移行期、映像文化期という時代の推移に伴って、確実に増加の傾向を示している(19.8%→22.7%→24.9%：1%水準で有意)。

逆に[E型]は時代の推移に伴って減少の傾向をみせている(12.4%→10.4%→8.4%：1%水準で有意)。

これらの事実は、消極的で引っ込み思案なシャイの内向型タイプの性格は少なくなり、人との接触に気軽に対応し、活動的で好奇心の強い、社交的な外交型の積極型タイプの性格が増えつつあることを物語っている。

③ これを更に裏付けているのは、[C型]の性格類型も[E型]と同様に減少の傾向にあることである(6.1%→6.1%→4.2%：5%水準で有意)。情緒安定型で控えめな、自己抑制的で慎重な性格タイプは少なくなっているわけである。かつての旧日本型の日本的女性は姿を消しつつあるとみられる。

IV. まとめ

本研究は「人格形成を規定する要因分析」の一環であり、家庭における文化的環境要因の変化が、性格の形成にどのような影響をあたえるかを明らかにすることを目的とした。

すなわち家庭の文化的環境要因の推移を、『活字文化』から『映像文化』への転換とし、YG性格検査の『性格因子』と『性格類型』と関連してこの目的を検証した。

結果としては、活字文化時代から映像文化に至る約30年間(昭和39年～平成4年)の間に、YG検査の12の性格因子中、有意な得点変化を示した因子は9つにもわたり、得点変化をみせなかった因子はわずか3つのみであった。しかも、両期の中間の『移行期』を通して3期間の得点変化は、増加・減少ともきれいな一定傾向を示し、家庭文化の推移が性格形成に明確な影響を示すことが立証された。

性格類型については、『E型』タイプは活字文化の時代から映像文化の時代にかけて、確実に減少傾向を示し、逆に『D型』タイプが増加の傾向を示した。このことは、消極的な内向型人間から積極的外向型人間への性格の変化を表すものといえる。

(本研究の資料の整理については、本学コミュニケーション学科・釘宮千絵美さんの多大な協力によるものである)

引用文献

- 江口恒夫 性格診断マニュアル 1979年
NHK 日本の子どもたち—生活と意識—NHK放送世論調査所編 1980年
坂本一郎編著 現代の読書心理学 1971年 金子書房
高橋正臣 人格形成を規定する要因分析—家庭における文化的要因の変化が性格形成に及ぼす影響について 大分県立芸術短期大学研究紀要 1981年
時実利彦 情操・意志・創造性の教育 教育学叢書20 1969年 第一法規出版
南 博 現代マスコミュニケーション 講座2 テレビ時代 1960年 河出書房

参考文献

1. Allport, G, W. 1961 Pattern and growth in personality : New York : Holt, Rinehart and Winston. 今田 恵 (訳) 1968年 人格心理学 (上・下) 誠心書房
2. 本明 寛編 性格の理論 性格心理学新講座1 1990年 金子書房
3. 詫間武俊・依田 明 心理学入門講座 新版6 性格 1975年 大日本図書
4. 若林明雄 3気質類型・複合構造モデルとパーソナリティのフラクタル性—パーソナリティ統合理論構築の試み 性格心理学研究 第2巻 第1号2-9
5. 品川嘉也 意識と脳 1983年 紀伊国屋書店
6. 塚田裕三 脳—科学はどこまで解明出来たか 1992年 同文書院
7. 田口孝之・徳田安俊 家庭の雰囲気について 心理学研究 第30巻 1953年
8. 宮城音弥 日本人の性格 1977年 東京絵書籍
9. 星野 命 文化とパーソナリティ 性格の科学 講座現代の心理学6 1984年 小学館
10. 木原健太郎編著 テレビと学力 1966年 明治図書
11. 波多野完治・寺内礼治郎編著 マスコミの世界 1969年 大日本図書